羅針盤　vol.66

校長　白岩博明

「ありがとうございました」

４月２１日（金）の朝、登校する生徒たちとの挨拶を交わし終えた後、校門付近をゆっくりと見回すと、校門左にある校訓碑側の”ハナミズキ”と校舎に向かう直線通路脇の”ツツジ”がなんと鮮やかに咲き誇っていることか。完全に目を奪われてしまいました。スマホで撮影し終えると、受付の職員が「とても綺麗に花が咲きましたね。心が和みますね。そうそう先生、実はですね、３月１日の高校卒業式のときなんですが…」と卒業式が終わって、校門付近で起こったことについて話してくれました。

「先生、卒業式は午前中で終わったんですよね。昼過ぎぐらいに生徒、保護者のみなさんが帰って行かれ、少し時間が空いて、１０数人の男の子たちがそこらあたり（校門前）に集まって、わいわいと賑やかに、楽しそうに話していたんですよ。きっと思い出話にでも花が咲いていたんだと思いますよ。そしたらその男の子たちがここ（校門）に一列に並んで何をするのかと思ったら、校舎に向かって『ありがとうございました』と大きな声で深々とお辞儀をしたんですよ。近くにいる人たちも驚くやら感心するやらで、なかなかいい光景でしたよ。あの子たち、よっぽど学校が好きだったんか、先生方にお世話になったんかどうか、感謝の気持ちを示したかったんでしょうね」と。

その様子を想像すると、何とも微笑ましく、誇らしく思えました。そして、誰だろうと想像もしてみました。職員の話を受けて、次のように続けました。

「この学年の生徒たちは、入学してから３年間、コロナ禍の真っ只中にいたんですよ。休校になったり、行事や部活も自粛や制限が繰り返されたりといった具合で過ごしたので、高校生活ってこんなはずじゃなかったと、むしろ不平や不満の方が大きかったはずなんですよね。そんな彼らがですか…」と。１０数人の男子がとった行動の理由を想像するのは難しい限りです。だからと言って、調子に乗ってやった行動だろうなどと簡単に結論づけてしまうのは余りにも短絡的で、彼らに申し訳ない気がします。

３年間を振り返ったとき、我々教職員は果たして万端な態勢で生徒に応じていたのだろうかと反省する点がいくつもあります。また、仕方がないということを優先して、生徒の想いをどこまで汲んであげることができたかどうか。しかし、生徒たちは踏ん張ってくれました。卒業式の式辞の中で、「こうした状況にあっても、希望の灯りを絶やさず、努力し続けたみなさんを誇りに思います」と語りかけました。その想いは揺るぎません。自分たちは不運だ、青春を返して欲しいなどと自暴自棄になることなく、時間の経過と共に事態や状況を受け止め、先を見据えて行動を起こしてくれた生徒たちには頭が上がりません。

大学や専門学校といった進路選択・決定に向けて頑張りました。足しげく校長室に来る生徒は例年通りでしたが、面接練習に来室する生徒がほとんどです。中には１０数回もの練習を積み重ねた結果、見違えるようなプレゼン力をつけた生徒。練習後に伝えた助言をちゃんとメモを取って帰る生徒。手厳しい助言に涙を流しながらも練習に励んだ生徒。そして、「国立大学に必ず合格して見せます」と宣言し、それを叶えた生徒。

私と関わった一部の生徒がそうであったように、進路決定に際しては迷走することはなかったのです。だからこそ彼らの行動は必然のこと。その光景に出合った職員には、感謝を込めた行動にしか映らなかったのです。

彼らの行動を大切に心に刻みます。改めて卒業生を誇りに思います。そして、私からも「ありがとうございました」を添えさせていただきます。